



著者と語る
『日本語が亡びるとき』
水村美苗氏

2009年2月6日

先ほど、今日いらっしゃっている方のどのぐらいが私の本（『日本語が亡びるとき』）を読んでいらっしゃるんでしょうか、とお聞きしたら、まあ3割ぐらいだろうというお返事でしたので、ここでは、基本的には、本の内容を簡単にまとめさせていただきます。英語でも日本語でも話しなれていないので、お聞き苦しいところも多いと思いますが、一応、この本にはこういうことが書かれているということです。

「もったいない」という気持ちから執筆

まず、どのような動機で書いたのかということから始めますと、一言でいえば、「もったいない」という思いがあったからです。例えばアメリカのコロンビア大学などでは、世界の古典を強制的に学部生に読ませる必須授業があります。そして、その中には、かの『源氏物語』が入ったりする。日本の誰でも『源氏物語』があることは誇りに思っているでしょう。だが、重要なのは、日本には『源氏物語』に象徴されるような古典があったという事実だけではない。重要なのは、日本には『源氏物語』に加えて、近代文学さえあったということです。近代に入ってから、日本語という近代国家の「国語」を手に入れることができたからにはかなりません。それなのに何というもったいないことになってきているのだろう。そういう気持ちがこの本の基本にあります。

数年前に長編小説を書き終えるころ、筑摩書房から話がありました。作家として書き始めてもうずい分と長い年数がたっているので、そのあいだに溜まったエッセイや評論をまとめて出さないかという話です。その時、巻頭エッセイを書き下ろすよう言われました。

そのころ私は長編小説を連載していたストレスで体調を壊しており、新しいものを書くような体力も気力もなかったんです。それで、以前にパリで講演したものに、ちょちょっと前後をつけるだけで、何とかごまかしてしまおう。最初はそう思って書き始めました。

巻頭エッセイは40～50枚の長さにする

つもりだったのです。ところが、書き始めたらすぐに、400枚、500枚という長さになってしまった。とてもこれでは巻頭エッセイなどにはならないということで、1冊の本にすることになりました。その後も書きたいことが山のように出てきて、自分がいったい何を言いたかったのかが分かるのに、5年間もかかってしまいました。

なんと「もったいない」と自分が思っていたのが分かるのに、5年かかったわけです。

本の前半にある、パリでの話というのは、フランス人に向けて私のおぼつかないフランス語で、英語の世紀を前に、フランス語と日本語は、英語ではないということにおいて、同じ場に立たされているという、フランス人にとっては少し衝撃を与えるような話です。

フランス語というのは、つい最近までは、英語と拮抗する言葉だった。のみならず、社会的な地位はフランス語のほうが高かった。17世紀ぐらいから、世界で一番立派な言葉だということで威張ってきた言葉です。ところが、20世紀が終わりに近づき、英語が支配的になってきた。英語が支配的になるにつれ、英語ではないという意味において、すなわち基軸言語ではないという意味において、日本語と同じ立場に立たされてしまったんですよ、と。パリでの話はそういう内容のものです。『日本語が亡びるとき』には日本語訳で入れています。

パリでの話では、最後に、私の2番目の作品『私小説 from left to right』（1995年 新潮社）に触れています。『私小説 from left to right』は、日本語の中に英語が散りばめられている横書きの小説で、日本語と英語とは視覚的にも異なる、まったく相入れない言葉であることをはっきりさせた小説です。でも、半分アメリカで育った私のような形式の小説で訴えたかったのは、日本語という言葉の特異性ではありません。そのような形式によってはっきりみえてくる日本語と英語の違いを通じて、すべての言葉の、ほかの何ものにも還元することのできない物質性を訴えたかったのです。どんなに読者数が少ない言葉で書こうと、書くというその行為に意味を与える言葉の物質性で

す。

物質性というのは、フランス語では「マテリアリテ」という言葉を使いましたが、ほかの言葉に置きかえられない物質性がどの言葉にもある。そういう立場で、1998年ですけれども、話をしたのです。

多言語主義から出発する

ところが、パリでの話から何年もたち、さらに『日本語が亡びるとき』を書き進むうちに、認識の転換というようなものが訪れました。パリの話にあったのは、多言語主義とでも名づけるべきもので、どの言葉も同じようにその言葉固有の物質性を持っており、どの言葉も同じようにいとおいしいとする立場です。人によって数え方が違いますが、現在6,000ぐらいはあるであろうといわれているどの言葉も、この世から消えていくのは悲しい。

パリでの話では、フランス語をわざと日本語と同じところまで引きずりおろしてしまっている、フランス人にとっては心穏やかならぬ話ではありますが、ある意味では、英語ではない言葉を母語とする人たちすべてにとって、とても快い結論だったと思うのです。

例えばアメリカン・インディアンの言葉は、ほとんど書き言葉を持っていない。それでも、その言葉の音をアルファベットに置きかえ、その言葉を保存しようという動きがある。例えば「おばあさん」という言葉があります。英語だったら「grandmother」か「old woman」でしかないけれども、一つのアメリカン・インディアンの言葉だと、それは、「the one who unites」、すなわち、人々の縁を取り持つ人とか、人間関係を取り持つ人となる。要するに、英語の「grandmother」とか「old woman」という言葉には絶対還元できない肯定的な意味を強く与えられた言葉であって、そういう言葉を残そうという運動があったりする。

それが多言語主義です。

そして、私のパリでの話というのは、その延長線の一つでもあった。ところが、その後、私

は、なぜあのような話をパリですることが可能だったか、その条件自体について考えるようになったのです。フランス文学と日本文学という二つの文学を比べることが、そもそも、パリでの話で、なぜ可能だったか。それは、日本に近代文学があり、しかもそれをフランス人の聴衆が知っているのを前提にすることができたからです。それがわかったとたんに、その前提は、例えば6,000あるすべての言葉にはほとんど当てはまらないということにも気がつきました。まずはほとんどの言葉が書き言葉を持っていませんし、当然古典も持っていないし、近代文学も持っていないわけです。

そのことに気がついたとたんに、なぜ、今のいままで、そのことに気がつかなかったかもわかりました。戦後の教育のせいです。戦後の平等教育——すなわち、ものの価値に絶対に上下をつけないということにおいて、多言語主義以上のことを考えるのを阻んでいたのです。それは、具体的には、現実というものを歴史的に考察することさえ阻んでいました。

日本語というものを客観的にみると、特殊とはいきませんが、固有の歴史をたどり、その固有な歴史をたどったがゆえに、国語としてあれだけ早々と成立した。国語としてあれだけ早々と成立したがゆえに、国民文学である近代文学があれだけ早々と成立した。そのこと自体が、広い歴史的視点からみれば、一つの奇跡でもあったといえるようなものである。

そのような、今から顧みれば当たり前のように思えることを、多言語主義を一度通ったことによって、初めて考えられるようになりました。

歴史的でもあれば抽象的でもある、言葉の支配関係、あるいは序列づけなど、そういうものに初めて興味を持てるようになりました。自分が問題にしているのが、「書き言葉」であって「話し言葉」ではないということも、初めて、自分自身にとって明確になっていきました。

戦後の教育はどういうものかといえば、例えば、福沢諭吉の『学問のすゝめ』があります。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」という出だしが有名ですが、戦後

の教育はそこで終わってしまっている。人間はもちろん、言葉にも上下関係があるなどと考えることを許さない。書き言葉がある言葉と書き言葉がない言葉に上下をつけてはいけなし、ましてや書き言葉の中に上下があり得るなどということなどは、許さない。ひたすらすべて平等がよろしいということになる。

でも、実際の福沢諭吉の『学問のすゝめ』は、ご存じのように「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり、されども今広くこの人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚かなる人あり」というふうにつき、だからこそ学問をしなければならないと言っています。

書き言葉としての「普遍語」

「書き言葉」について考えていくうちに、自分が受けた教育によって、自分自身が見なかったところ、見えなかったところへ入っていくことになりました。そのときに、幾つかの造語をつくらないと、自分が考えてることをお伝えできないことを発見しました。まずは、それらの造語について簡単にご説明したいと思います。

一つは「二重言語者」という概念です。「バイリンガル」というと、二カ国語、ことに英語と日本語をペラペラと話せる人を想像しますが、「二重言語者」というのは、もっとも基本的な定義としては、自分が母語としない言葉を読む人たちです。

次に、「叡智を求める人」。これも私が勝手につくった言葉です。「知識人」という単語があまりに手垢にまみれているので、「叡智を求める人」という言い方をしました。種としての人間は「ホモサピエンス」、すなわち「叡智を持った人」ですから、叡智を求めるのは人間の本性でもあります。その人間の中でもことに叡智を求めるのが、「叡智を求める人」です。

「二重言語者」の多くは「叡智を求める人」でもあります。ただし、「叡智を求める人」が必ずしも「二重言語者」になることができるわけではありません。人は高度な教育を受けないと「二重言語者」にはないので、歴史的には、

ほとんど場合、社会的に恵まれた層に生まれた男性しか「二重言語者」になれなかった。

もちろん、王様のように、社会的に一番上の地位にある男性が「二重言語者」であったかといえば、決してそういうことではありません。近代以前、王様たちは、ほとんどの場合は、「単一言語者」であった。その下にいる僧侶や学者やらが「二重言語者」だったわけです。

さらに、私が勝手につくった概念で、「読まれるべき言葉」という長ったらしいものがありますが、これは簡単にいえば古典です。

そのほかに、「図書館」という概念もあります。これは書物の総体を指す言葉です。これらの造語を使って一言でまとめれば、「叡智を求め人」たちの多くは、過去の歴史において「二重言語者」であり、そして彼らは、「読まれるべき言葉」を読むために「図書館」に出入りしていたというふうになるわけです。

なぜそのように考えていったのかということ、人間と書き言葉の歴史を考えていったからです。ふつう私たちは忘れていますが、人間は最初から母語で読み書きしていたわけではありません。人間が母語で読み書きするようになったのは、近代に入ってからのことではない。自分自身が考えていることをそのまま表現しようなどという感覚が生まれてきたのは、国語が誕生したあとのことです。書き言葉というのは、歴史的には、常に外から来た言葉であり、他者の言葉だったのです。なぜなら、書き言葉というものは、かんたんに人類が発明できるようなものではなく、それは、必然的に、書き言葉を発明できた大きな文明から近隣へ近隣へと広がっていったものだったからです。

それが私自身に明確になったときに、言葉というものを3つに分けて考えていこうということにしました。まず一つは「普遍語」です。ヨーロッパの場合には、ギリシャ語もそうですが、最も代表的なのはラテン語です。ラテン語はローマ帝国が滅びた後でも、1,000年間西ヨーロッパを支配しました。書き言葉というものは、読む人がたくさんいればいるほど、その言葉で書く人がたくさんいるようになり、そ

の言葉で書く人がたくさんいればいるほど、その言葉を読む人がたくさんいるようになる。そのような自動運動があるからです。私たち日本人にとっては、「普遍語」は漢文でした。イスラム教の人にとってはアラビア語です。もちろんそれより前にサンスクリットなどもありますが、ともかく、広範囲を覆う書き言葉として、「普遍語」というものがあつた。

それに対して、普通の人が日常的に話していた母語を、私は「現地語」と呼んでいます。「現地語」は「普遍語」の対概念で、生活語です。ご飯を食べたとか食べなかったとか、要は、風呂、メシ、寝る、そんなのが現地語です。

印刷技術により「普遍語」から「現地語」へ

近代になる前は、普通の人は「現地語」を話すだけで、ごく少数の「二重言語者」だけが、「読まれるべき言葉」を読むために「図書館」に入っていたわけです。けれども、それが印刷技術の発達によって大きく変わる。印刷技術の発達で一番有名なのは、グーテンベルグの聖書です。それまで手で写し、非常に高価で希少だった本が、印刷技術が発達したことによって、普通の人たちに行き渡る可能性がふえてきた。だけれども、それだけでは十分な条件ではない。そのとき、ちょうどヨーロッパにおいて資本主義が発達してきた。市場、そして、その市場を可能にする流通が発達してきたわけです。それで、まずはラテン語の書物が行き渡るようになる。その次の段階として、ラテン語を読めない、「二重言語者」ではない大勢の人たちにも読める本を出版しようという運びになっていく。市場は常に自分のシェアの拡大を求めますから、その市場原理でもって、「現地語」というもので本が出版されて流通するようになる。その「現地語」の書き言葉の流通から、次第に「国語」というものが生まれてくるわけです。

これは私の考えではなく、今や古典だとされる『想像の共同体』（増補版 NTT出版）という本で、ベネディクト・アンダーソンという人がいっていることです。「国語」が生まれるに

は、印刷技術の発達は十分な条件ではなく、出版資本主義が成り立つだけの、資本主義の発達が必要であつた。それによって、「現地語」の本が流通するようになる。それだけではない。利潤を生むためには、あまりに小さい規模で出版してもしかたがない。それぞれの方言で数百冊ずつ出版してもしかたがない。利潤を生むだけの規模で出版しなくてはならないということで、それまでは数限りなくあつた話し言葉としての「現地語」が、書き言葉、あるいは、出版語になるうちに、整理されてくるのです。

例えばイタリアでは、ダンテが『神曲』で使った言葉はフィレンツェの方言でしかなかったけれども、それがイタリア全土で出版語として流通するようになる。そして、イタリアの話し言葉はそれぞれ地方の言葉であっても、書き言葉としてはフィレンツェの方言を元にしたイタリア語というものができていく。それが国境争いの戦争などと絡み合った近代国家、国民国家の成立とともに「国語」となっていく。

その「国語」で国民文学が書かれ、それによってさらに国家意識とかナショナリズムが強化され、それが強化されることによって、今度は国民文学がさらにナショナリズムを強化するように書かれて、という循環があり、「国語」と国民文学というものが流通しながら、一つの国家を形成していった。そういうふうアンダーソンはいっています。私の言葉でいえば、近代というものは、「普遍語」の書物が「図書館」からだんだん消えてゆき、その代わりに、「現地語」の書物がだんだんふえていった過程だともいえます。

しかしながら、そのとき「現地語」はすでに、風呂、メシ、寝るといった生活語ではなく、「普遍語」からの翻訳を通じて、「普遍語」と同じような、倫理的、知的な機能を追うようになっていった。言い換えれば、「国語」とは、翻訳を通じて、思考ができる言葉となった「現地語」です。「国語」が成立すれば、「国語」の「図書館」に出入りするだけで、「普遍語」の「図書館」に出入りするのと変わらない叡智を得られようになる。そしてそのような「国語」の成立が18世紀、19世紀、20世紀にヨーロッパ

のさまざまな国々で起こっていったわけです。

つまり、「普遍語」があり、みんなが話していた「現地語」があり、「普遍語」が「現地語」に翻訳されるうちに、「国語」が生まれた。

このように言葉をその3つの種類に分けて考えていくと、日本語の辿った道がよく見えてきます。日本は、西洋の一部ではないにも関わらず、「国語」というものが、明治20年代、すなわち1890年ぐらいには成立しつつあった。『浮雲』という近代小説が書かれたのは1887年です。私たち日本人は、このような事実をごく当たり前のことのように考えていますが、世界史からすれば、それは当たり前ではない、日本語が辿ってきた固有の歴史は実に奇跡的なことだった——書き言葉の歴史を考えるうちに、私はそう思うようになったのです。

パリでの話までは、多言語主義的な話ですけれども、3つの言葉を中心とした歴史的な考察を境に、日本語の話に移っていきます。

日本語の発達を促したのは漢文圏からの距離

なぜ、日本語という「国語」が生まれたこと自体が奇跡的だったと思うかという話に入ります。日本語が19世紀の最後の方に「国語」たりえたのは、ひとえに、日本の地理的、歴史的条件に負うと思います。最初に重要なのは、漢文圏にありながら、中国と海を隔てていたという地理的条件です。漢語という「普遍語」と地続きの朝鮮とベトナムでは、「現地語」が十分に発達しなかった。それを象徴するのは、彼らは科挙制度を取り入れたということです。

科挙制度を取り入れたとはどういうことを意味するか。科挙制度は、読書階級に生まれた男の子の中で頭のいい子を、家族から親戚に至るまでの人たちが支援して、朝から晩まで勉強させる。試験に合格する平均年齢は三十何歳です。すなわち、「二重言語者」になることができる階層に生まれた、頭脳優秀な男の人たちがどんどん漢語の中に吸収されてしまうシステムなのです。そのおかげで、ベトナム人と朝

鮮の人たちは非常にすぐれた漢語を書けるようになった。

それに引き替え、日本人は、一時は科挙制度を取り入れようとしたのですけれども、海を隔て、中国の牽引力が十分働かなかったので、「現地語」が発達していったといえるでしょう。つまり、「二重言語者」の男の人たち、漢文を読み書きした男の人たちが、「現地語」である日本語でも読み書きするようになった。それは大変大きなちがいだと思います。朝鮮においては、「二重言語者」の男性同士は漢語でやりとりしていたのに、日本では必ずしも漢語でやりとりすることはなくなった。もちろん、日本においても、明治時代が始まるまでは漢語が「普遍語」であり、漢語で書かれたものが権威をもっていた。和文はその下にあったものでしかなかった。たとえば、公文書は明治以前はすべて漢語で書かれていた。それでも、日本は漢文圏から遠かったことによって、「現地語」が発達しており、それが日本語がはやばやと「国語」として成立しえた一つの条件だったと思うのです。

もう一つの条件は、日本の出版資本主義の広がりです。江戸時代の途中から日本の資本主義がいかに発達していたかということは、戦後の日本史の研究の中でだんだんと分かってきたことです。江戸幕府がもたらした平和や交易を活発にした参勤交代制度も重要ですが、それでも地理的条件が果たした役割も少なくありません。たとえば、川や入江が豊富にあった島国だったことは、海運交通を可能にしました。いずれにせよ、近世において、ヨーロッパを抜かして、日本ほど資本主義が発達していった国はなかった。そして、資本主義の発達というのは、必然的に識字率の上昇を伴います。

明治維新のころ、スカンジナビアなどは、驚くほど識字率が高かったんですけれども、日本も、ほかの西ヨーロッパ諸国に比べても高いぐらいの識字率をもっていた。それは出版語が流通していたということです。だから、明治維新直後に木版で出た『学問のすゝめ』などが、最終的には、全部合わせると300万部も売れた。いまでいうと10人に1人買ったということになる。江戸時代にすでに出版技術があっただ

けでなく、資本主義が発達しており、それで「現地語」が広く流通していたということです。

三つ目の条件は——これが一番身近な条件だと思いますが、西洋列強の植民地にならなかったということです。私たち日本人はそのことを当たり前にも思っていますが、それがいかに希有なことだったか、西洋列強の植民地にならなかった国の少なさというのを、考えてみればすぐにお分かりだと思います。アジア、アフリカをみて、本当に少ないのです。日本は逆に隣国を植民地化した側に回ったりしましたが、まずは西洋列強の植民地にならずに済んだ。それによって、次は、引き続き西洋列強の植民地にならずに済むよう、自分の国の運命を自分でつかさどらなくてはならなかったわけです。

漱石も鴎外もない社会

西洋列強の植民地になったらどうなるか。普通、植民地化されたところでは、言語の二重化が起こります。宗主国の言葉が「普遍語」として流通し、普通の人たちの使う言葉が「現地語」として残るだけです。だから、たとえ日本に、あれだけ印刷資本主義が発達したといっても、もし日本が西洋列強、例えばアメリカの植民地になっていたらどうなったでしょうか。

明治維新があったのは、日本にとって非常に幸運な時期でした。西洋が偶然たくさん戦争を始めた時期だったからです。維新の志士の働きもありましたが、西洋がクリミア戦争、南北戦争、普仏戦争などに突入しており、それも日本が植民地化されなかった大きな要因です。

たとえ、あれだけ印刷資本主義が発達していたとはいえ、もしアメリカの植民地になっていたならばどうなったか。その時は、公文書の作成も、立法、行政、司法、そして大学教育も、英語という「普遍語」でなされるようになったでしょう。日本人の「二重言語者」も英語で読み書きできるようになる。すると、英語を読み書きできる人とそうではない人たちとの知識の差もなかなか縮まらない。「二重言語者」は、「現地語」しか読み書きできない人に向かって

は書こうとしなくなっていったと思います。社会そのものが、「二重言語者」とそうではない人々に分けられた、植民地化された社会特有の社会になる運命にあったと思うのです。

20世紀半ばで日本が独立したところで、それまでの間、英語が「普遍語」として使われていた事実は消えない。それは何を意味するかといえば、二葉亭もない、漱石もない、鴎外もない、谷崎もない、そういう社会に私たちは住むことになったということです。

ところが、日本は西洋列強の植民地にならなかった。言葉という点からみれば、植民地にならなかったのを一番大きく象徴する現象は、日本に、日本語で学問ができる大学ができたということだと思ふのです。大学は大きな翻訳機関として機能し、西洋語に蓄積された知識を丸ごと日本語に移し、西欧列強に立ち向かえる近代国家に必要な日本語という「国語」を作っていた。「国語」を作るのに大学の果たした役割はいくら強調してもしたりないほどです。今でも、旧植民地では、かつての宗主国の言葉で高等教育を行っているところが多い。

私がいつも不思議だと思うのは、そういう一つの国の運命を、そのまま象徴するような人が出てくることです。漱石がまさにそういう人です。最初、東京帝国大学ができたときは、洋学を知っている日本人はいないから、先生は必然的にお雇い外人になる。そこへ、英国留学を済ませた漱石が、ラフカディオ・ハーンを追い出し——別に彼が追い出したわけではないですけれども——ハーンのかわりに、初めて日本語で英文学を教えるようになる。日本の大学において日本語で洋学を学問できるようになったという事実をあの漱石が象徴した。そのことは、とてもおもしろいと思います。漱石が漢文学をよく知っていて、それを途中で捨てて英文学をやらざるを得なかったということも、とてもおもしろいと思うのです。

もちろん、日本の学問の場というものは、西洋の学問の場と同じ意味は持ち得ません。一つには、それは大きな翻訳機関でしかないので、そこで一生懸命日本語で学問を発表しても、西洋人、さらには世界の人を読める、学問の世界

においての「読まれるべき言葉」の連鎖に入ることはあり得ないからです。日本人は100年間ずっと学問を続けながら、極端な言い方をすれば、紹介者、翻訳者でしかなかったということです。日本に関して書いたときは、日本語で書くことに意味があるわけですが、それ以外のことに関して書いたときは、日本語で書いている限り、世界の人にとっては意味をもたない。しかもそれだけではありません。日本の学問の場で使われているのは洋学の翻訳語としての日本語です。そのような日本語では日本の「現実」とでもいうべきものは、とても捉えられない。西洋でも学問の言葉とふつうの人が使う言葉はちがいますが、その距離が日本の場合には極端にならざるを得なかったのです。

日本語の成立という奇跡

洋学を翻訳したような日本語だけでは、自分たちが生きている日本の現実はとてもとらえられない。その思いは、日本近代文学の黎明期には非常に強かったと思います。それで、学問の外、大学の外に出て書こうという気運が大変高まっていて当然だった。優秀な人たちほど大学を飛び出し、翻訳語には還元できない新しい日本語でものを書かなくてはならない、そういう必然性が日本の中にあっただけです。だから、在野の学者が生まれ、批評家が生まれ、そして、もちろん文学者が生まれた。

そのような動きを象徴するのはまた漱石です。漱石は大学で英文学を教えていたころは、自己諧謔を交え、自分のことを「洋学の隊長」と呼んでいます。ところがそのうちに「洋学の隊長」であることをやめる。大学をやめて、日本語で小説を書くようになり、日本文学をあれだけ豊かなものにしてくれたわけです。

かくして、地理的条件や歴史的偶然などが重なり、いくつもの危うい道を通り抜けた末に日本語という「国語」、そして、日本近代文学もできたというふうに私は思っています。

これは日本の教育の中でほとんど抑圧された事実ですが、日本近代文学を最初に作った人

たちは、みんな「二重言語者」たちだった。二葉亭四迷はもちろんそうです。ロシア語でロシアの近代文学を読み、最初の日本近代文学と呼ばれるものを書いた。坪内逍遙も「二重言語者」ですし、漱石や鴎外もそうです。尾崎紅葉さえそうです。それで当然だったのです。

ところが、「国語」というものは一度作られると、必然的にその起源は忘れられ、あたかも自分の魂そのままの表現のように思われるようになります。それが「国語」の運命です。日本では、「国語」の起源の忘却は自然主義から始まったように思いますが、実際に「国語」が自己表現の道具のように扱われるようになったのは、戦後教育からだと思えます。

戦後教育の国語がどのような方向に動いていったかということ、「読まれるべき言葉」を読ませるのに重点を置くところから、自分が思ったことそのままを自己表現するとか、見たことそのままを描くとか、そちら側に重きを置くようになっていった。これは戦争を境に、日本を戦争などに掻き立てた日本の「書き言葉」の伝統から自由になりたいという欲望が背景にあったことでしょう。でも、結果としては、子どもたちが書けるようなものを読ませる、ということは、少しでも難解なものは避ける、という風に徐々になくなっていったと思うのです。そのうちに、世界でも際だった読書力を持っていた人口——自分たちの国民文学も読めば、世界の翻訳のものも読むという読書力を持っていた人口がどんどんと層が薄くなってしまった。「読まれるべき言葉」を読むためには、読むという行為がある種の困難を伴ってもいいという感覚を失っていったと思うのです。国語の授業の時間も少なくなっていった。

そこに英語が新たな「普遍語」、昔のたんなる広範囲を覆う「普遍語」とちがい、全地球を覆う「普遍語」として台頭したわけです。英語の支配は実際には18世紀から始まってはいませんが、それが20世紀後半になって、急に目に見えるようになった。21世紀に入った今となっては、インターネットという新しい技術が登場したせいで、もう誰も無視できなくなった。せつかく「国語」たりえた日本語を粗末にして

きたという事実と、全地球を覆う「普遍語」としての英語の台頭。その二つが絡み合っただうなるかというのがいまの状況だと思ふのです。

このままほうっておいたらどうなるか。どんな社会でもそうですけれども、「叡智を求め人」というのは「普遍語」を読みたい人、すなわち「二重言語者」になる傾向をもつ人です。このまま無策でいると、「叡智を求め人」ほど、日本にいながら、頭脳流出してしまう必然性が高い。それは、「叡智を求め人」が日本語を真剣に読まなくなることによって、日本語がいずれ知的、倫理的な重荷を担わない言葉になる、「国語」から「現地語」へと転落する可能性が出てきているということです。

すべての国語が岐路に

これは日本に限ったことではありません。例えば、十年ほど前、イタリアのシエナに行っていたときの事です。シエナ大学の先生たちは、国際的なニュースを知るためにはヘラルド・トリビューンなど英語の新聞を読んでいた。そして、自国のスポーツ試合などの結果を知るためには地元の新聞を読んでいた。インターネットが広まる前の話ですが、すでに、「国語」であるイタリア語は、「普遍語」の英語を前には、あたかも「現地語」のような形で流通していたのです。今や、インターネットによって英語で蓄積され、流通する知識の質と量がいよいよ違ってきてしまっています。当然、日本人でも何かを知りたいという欲望が強い人ほど、英語を読むようにならざるをえないでしょう。

昔、朝鮮やベトナムの人たちが漢語に吸い込まれてしまったように、今、世界中の知性が英語へと吸い込まれてしまう可能性があるのです。今、日本語だけでなく、すべての「国語」が実は岐路に立たされているのです。

日本の人はよくシンガポールを理想化して考えます。みんながバイリンガル、つまり英語ができ、しかもそれぞれの言葉をもっているからです。けれども、シンガポール人が「書き言葉」として真剣に読み書きしているのは英語

だけなのです。シンガポール人の作家はほとんどがみな英語で書いているのです。大学のレベルでは、ほとんどが英語で教育が行われているのです。ということは、実際に彼らの母語は日常語、「現地語」に近いわけで、話し言葉だけをみているとバイリンガル国家のように思えますけれども、本当は英語国なのです。

また「国語」を今現在作ろうとしている国もあります。たとえばフィリピンでは、フィリピン語というタガログ語という方言を基本とした「国語」を広めようとしている。でもタガログ語を母語としない人たちには抵抗があったり、上層階級は英語で読み書きしたりしている。このままフィリピンが国語政策を推し進めていくか、あるいは、諦め、いっそのこと英語を「国語」としてしまおうかという結論に達するか。それは何ともいえません。

これからすべての「国語」は、岐路に立たされることになると思います。そういう中で日本語は一体どうなるのか。

すでに申しあげたように、私は、日本語に関しては、もったいない、と心底思っています。別にどの国も自国語を護る必要はないと思うのです。国によっては英語を「国語」としてしまふ国が出てくるだろうし、あるいは、二重言語状態でずっとやっていく国があるだろう。だけれども日本人は日本語を選び直すべきだろうと思うのです。ここまですでに「国語」としてきちんと機能し、近代文学も生み、さらには翻訳文化がしっかりして、日本語しかできない人でも、世界で起こっていることがわかる。そのような言葉は、現状では、非西洋語ではまだそんなにはないのです。ですから、このまま無策でいるのはあまりにもったいない。

その思いがあつてこの本を書いたわけですが、では、この日本語をどうしたら護ることができるかということです。

本の最後の7章が国家への提言のようなものになっています。このような本を書いたからには、一応具体的な提言もしないといけなかつたからです。基本的に二つの提言があります。一つは、英語教育に関してで、国策として、

十分なお金を投じ、一部の優秀な「二重言語者」を育てるべきだという提言です。もう一つは、日本語教育に関してで、もっとまともな人文教育を施す、即ち、日本語で「読まれるべき言葉」を読ませるべきだという提言です。

国策として優秀な二重言語者の育成を

英語教育に関して、私が反対するのは、いま日本の政府が想定するともなく想定している、「総バイリンガリズム」という概念です。すべての日本人が日本語も英語もできるようになるべきだとする概念です。ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、私は12歳からアメリカへ行って、20年アメリカで過ごしました。いかに日本語と英語とがかけ離れているかということをよく知っています。いかに日本人にとって英語を学ぶのが困難であるかをよく見てきています。国語の時間を削って英語を教えたりしても、バイリンガルなどは育ちません。そのような教育は「セマイリンガル」、すなわち、どちらの言葉もろくに操ることができない人間をつくるだけなのです。優秀な外国語の使い手となる人というのは、母語がきちんとしているというのが基本条件です。

日本が国家としてすべきことは、母語がきちんとしている人たちの中から優秀な人を選び、国費なり私費なりを投じて、優秀なバイリンガルを育成することです。それもある程度の数で育成する。戦後教育の、みんなに平等教育を与えなくてはという理念が強過ぎ、国家の方針としてその一步が踏み出せない。でも、ある程度の厚みをもった優秀なバイリンガルの存在は、日本という国を守る国防政策としてもこれから必要だと思うのです。このままでは、日本はアジアの中で遅れをとります。

例えば、これは先日イェール大学の先生から聞いた話です。一般のアイビーリーグと呼ばれているアメリカの大学に関しても同じことがいえると思いますが、2007年、日本国籍でイェール大学に入学願書を出した人はたった21人しかいなかった。(そのうち1人を受け

入れたら、その人はハーバードへ行ってしまったそうですが)。ところが、日本の半分以下の人口の韓国からは2,000人以上も入学願書があったそうです。もちろん中国からはもっと多い。アジアの国々は英語のエリートを育てようと国策として頑張っているわけですね。つい最近、台湾は方向転換をしたという話を聞きましたが、そのあたりはよく分かりません。分かっているのは、ヨーロッパはもちろん、アジアのほかの国と比べても、日本には十分のバイリンガルが育っていないということです。

日本は、そういう人たちをつくらないことには、国際会議などできちんとした発言ができないだけではない。これからは情報が世界で飛び交う時代です。世界の知識人がインターネットで読む英語の新聞には、掲示板に書き込める記事がありますが、その記事が間違っていたときに、パッと反論を書き込める人たちがいない。

ニューヨークタイムズはオオニシさんという方がつい最近まで日本の記事をよく書かれていましたが、私からみれば、適切な扱い方をしていないことがある。例えば彼はいかに日本人のあいだで「嫌韓流」という漫画が日本ではやっているかを大きく取り上げましたが、その記事には、いかに日本人が「冬のソナタ」に夢中になっていたかに関しては一言も触れられていない。情報として偏ったものが流通してしまう。でも、日本人で、それにパッと反論できる人もいないから、そのような日本のイメージが世界で流通し続けることになる。

ですから英語教育に関しては、一部の優秀なバイリンガルを育成する。そして、すべての日本人にもっとまともな日本語教育を与える。少なくとも教育の場においては、そのような信念に基づいた教育をしていかないと、世間では英語ができなくてはという強迫観念が強くなる一方ですから、日本語はなし崩しにだめになっていってしまうのではと思うのです。

そして、私は近代文学をもっと読ませるのを、日本語教育の根本に置くべきだと思っています。この本をお読みになった方のあいだで、なぜ、今更近代文学なのかという反発が大きかったと聞いています。そのような反発が大きかった

たこと自体が、日本が国語教育というものを真剣に考えてこなかったせいだと思います。

たしかに『源氏物語』を読むのは大変です。専門家しか読めない。でも、近代文学というのは慣れさえすれば読めるのです。一葉だって読めるのです。出版資本主義が発達し、さらに今に通じる国民国家ができたときに成立するのが「国語」であり、その「国語」で書かれたものが近代文学です。近代文学は広く国民に流通することによって、書き言葉として安定し、国民国家の中で読み継がれることができる。近代文学は近代的な言語観、近代的な世界観のもとで書かれているのですからなおさらです。

日本語を護っていくという使命

例えばイギリス人は、学校の授業で、チョーサーまでは戻れなくても、シェークスピアまで戻るのは当たり前だとしています。少なくとも近代文学の古典に戻るということが、人文教育の基本にあります。そのような人文教育があつてこそ、しばらく前にジェイン・オースティンの『高慢と偏見』が十代の人たちのあいだでベストセラーになったりする。200年以上前に書かれたものに戻ることができて当然だとされているのです。学校という場が、市場が与えないもの、家庭が与えないものを与えようとする場だというのは常識でしかないのです。

ところが、その常識が日本にはない。私が100年前のものを読んでくださいというだけで、懐古趣味だとか個人的な趣味だとかいうことになる。たった100年前のものを読めなくなって平気である。日本の年とった人たちは、若い人に迎合するのが好きです。新しいということに価値を置くということが、自分の若さの象徴となると思っているかもしれませんが、そういうところで、古いものを読めなくてはだめだという、ごく当たり前のことをもっと多くの人たちに主張してもらいたいと思うのです。

教育の場で近代文学をもっと読ませるといふには、さらにもう一つ重要な点があります。

それを私は難易度の不可逆性と呼んでいるのですが、一度近代日本文学を読んだ人にとって、いまのものを読むというのは実に簡単なんです。スカスカだから、パッパッと読んでいける。ところが、いまのものしか読んでいない人にとって、逆は無理なんです。読書力というのは運動と同じです。若いうちに密度の濃い文章を読む訓練を受けないと、若いうちに歩かなかつた人と同じで、脳が読書力をきちんと育てられない。ですから、大学を出るぐらいまでに、これだけの近代文学を読んでおくというのが当たり前だというような教育を与えてほしい。

思うに、日本が日本語を護るということは、これから自分たちの国語をどうしようかと思っている国、自分たちの国語をつくるべきか、どうしようかと迷っている国などに対して、一つのモデルを提供できると思うのです。主にアジア、アフリカの国に対してですけれども、一つのモデルを提供できる。非西洋語であっても、ちゃんと国語として機能し続けることができるんですよ、ということです。だからこそ、日本語を護っていくというのが、日本語を使う人間にとっての人類的な使命ではないか。そんなふうな大げさに考えているのです。

ごめんなさいね。あまりうまくまとまらないで。(拍手)

質疑応答

司会・中井良則企画委員(毎日論説副委員長)
どうもありがとうございました。質問に移りたいと思いますが、最初に私からうかがいます。この本への反発というお話がありましたが、その一つに、一部のすぐれた二重言語者を育てればいいというのはエリート主義ではないかという反発があったと思います。エリート主義だという言い方をする人は、教育というのは平等でなければならないという前提からの批判だと思いますか。それに対しては、どういうふうに答えますか。

水村 英語で choose between two evils と

いうのがありますけれども、それが最高形態ではないけれども、まだまだというお答えしかありません。本当の理想郷は、すべての人類がすべての言語を操ることができる状態。多言語主義者の理想郷でしょう。その理想からどんどん離れて、すべての日本人が日本語を存分に操ることができ、かつ英語も存分に操ることができるのを理想郷だとする。「総バイリンガリズム」ですね。ところが、それは不可能なのです。現実的には、すべての日本人がどちらも存分に操ることができない悲惨な状態か、一部の日本人だけが日本語も英語も操ることができる不平等な状態か、どちらかしかない。その二つを比べれば、後者を選ぶべきだと思うのです。所得の再分配や翻訳文化の充実を図れば、その不平等は少なくとも済むと思います。

民主主義も全体主義よりはまし、資本主義も資本主義の否定よりはまし。そういう現実的な選択を下して人類はやってきている。日本語が亡びるのを防ぐためには、これしかないというふうに考えれば、選べると思います。

司会 あともう一つ、ここは日本記者クラブですので、ここにいる人がみんな、新聞記者とか放送ジャーナリスト、あるいはそのOBなんですけれども、日本の新聞あるいはメディアの日本語について、何か注文はないですか。

水村 それはありますよ（笑）。例えば表現の自主規制ですね。ある言葉、ある形容詞を使うことによって、ある現実を低くみて、ある現実を高くみるという、何というのかしら、言葉は世界を分節するためにできているものだから、そういう類いの言葉をどんどん規制していくと、とっても貧しい退屈な文章になりますね。だから、そこはやはり自主規制を少しは緩めていただきたいというふうに思います。

例えば私が新聞に書いていたときです。『源氏物語』のころのことを書けば「下人」という言葉は当然出てきていいと思ったのですが、それがだめだったんです。もちろん漱石がよく使っていた「下女」もだめです。貧しくて退屈に

なるだけでなく、過去がわからなくなる。歴史がわからなくなる。記者の方が書く文章と、外部の人間が記名入りで書く文章とでは、もっと基準を変えていただければと思います。

それから、なかなか文部科学省なんかは動いてくれないでしょうから、できることなら、新聞や雑誌に日本近代文学の古典みたいなものを再連載するという。ルビつきで、旧仮名遣いで。さらには若い作家の方に挑戦してもらうために、旧仮名遣いでお願いしますというコーナーを作るとか、メディアとしてできることはいろいろあるのではないのでしょうか。

質問 これは質問でなくお礼と感想です。ずっと前に大蔵省の次官をしていた小粥正巳というのが旧制の中学校の同級生なんですが、彼に、アメリカにいた女性が夏目漱石の『明暗』の続編を書いたからそれを読め、といわれたんです。当時、私は水村さんの名前も知りませんし、そのころはいまほど有名じゃなかったと思います。そういう、しかもアメリカに長くいた人が、大文豪の続編を書くなどという大それたことを、とびつくりしましてね。しかし、読んで、偏見を持っていたことを反省しました。それから、『私小説 from left to right』、これも非常に不思議な小説ですが、読みました。その次の『本格小説』、これも小説の題名としては、普通はだれもつけないようなことですが、これも読みました。で、この本が出て、これも非常に刺激的な本で、大変感心して読みました。

私も水村さんと同じようなことを主張しているんですけども、一つも実りません。小学校から英語をやっても何の役にも立たないといっているんですが……。私は歳をとっておりまして、頭がかたくなっておりませんが、応援をする力がありますので、今後とも刺激的な発表を続けていただきたいと思います（笑）。

それから、水村さんをここに呼ぶという企画を立てて、実現してくださった企画委員の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

質問 最近の若い、例えば芥川賞をもらった

ような作家の作品を、どのようにみておられるか。

水村 私もかなりの年齢なので、実は、若い方の書いたものってあんまり読んでいないんです。それと幸い、著者の名前を読まずに本を読むという癖がついているんです。私がアメリカにいたころ、改造社版の旧い現代日本文学全集という、母よりもう一つ上の世代の人たちが読んだ本が家にありました。ところが子どもですから、作家の名前をみても、意味をなさない。自然にだれが書いているかということを見ずに本を読む癖がついてしまいました。谷崎もおもしろいから何回も読んでいたのですが、大人になって、ああ、これが大谷崎なんだというのが初めてわかるというふうでした。ある意味でとっても特権的な読書体験だったと思います。

でも、その癖がいまだに続いていて、いろいろ送られてきて、パッと読んで、あ、おもしろいじゃないと思っても、だれがおもしろいんですか？といざ訊かれると、ほんとにわからないんですね。そのうえ、歳をとってきて、あまり興味が見出せないもんですから。

ただ、もう四半世紀前ですが、私が日本に帰ってきたとき、日本語の密度が薄くなってきたなという気はすでにしました。それと、昔のものばかり読んでいた感触からいうと、いつのまにか日本人は、西洋と非西洋という非対称関係の中で生きているのがわからなくなっているという気が強くしました。

西洋人からみると日本は自分たちにとってとても異質な国なのです。ところが、日本人は、あたかも同じようなつもりで生きている。明治のころに書いていた人たちは、日本が西洋ではないことをはっきりと知っていた。当時書いていた人の方がより世界性を持った世界観の中で書いていたなという気がします。

いずれにせよ、大衆社会になってからは、書かれたときに売れているものは、例外をぬかして、そんなに重要なものではないように思います。国の文化の水準を測る基準としては、いま新しい何が読まれているかよりも、いまだれぐ

らいの厚さの層が、どれぐらい過去のものを読んでいるかのほうが重要だと思うんです。日本でいえば、現在の作家に読むべき人がいるかいないかよりも、いまの若い人たちが、たった100年前のものも読めなくなっているということのほうがよほど問題だと思います。いま、よい作家がいるかいないかなどは、後にきた人たちが判断したらいいことだと思います。

質問 日本語を憂える作家の立場からして、いまの総理大臣の日本語をどう思われますか。もし問題があるとすればどういう点が問題か教えていただきたいと思います。

水村 日本語以前の問題が大き過ぎて（笑）ちょっと……。例えば、漢字の読み方なんて私はしょっちゅう間違えますので、こちらも赤面するぐらいでしたが。だけれども、これは日本の政治家一般に関していえませんが、一步日本の外の世界というものの把握のなさとか、もちろん言語によって思考しているわけですが、それ以前の問題が大き過ぎると思いますね。

ただ、漢字の読み違いだけに限っていえば、漢字が読み書きできればいいというものではないと思います。漢字検定試験がはやっていますが、そのようなものがはやっているということ、日本語が亡びないということ、これはまた別だと思うんですね。わからなくてもいいから、読んでいてそのリズムがいいことがわかるとか、書き言葉というのは、漢字の読み書きの正確さよりも深いところで人間の全部に働きかけるものなので、その経験を若いころからしないと、言葉の使い方の高みというものがわからないまま終わってしまうと思っています。

質問 実は、最近のラジオというのは、インターネットでの交流がありまして、以前ははがき、それからファクスだったんですが、いま90%がインターネットなんですね。それで、言葉が増殖するのはいいんですけども、実はそこに、水村さんもおっしゃったような、空虚なものが流れていて、10人送ってきても

一つも採用できなかつたりする。そういうことがほとんど日常に起こってしまっていて、危機感を感じています。最近では携帯小説もありますが、インターネットと言葉の関係性を、どのように考えていますか。

水村 難しいですね。この本が出た直後に、梅田望夫さんというインターネットの専門家の方とお話したことがあります。私自身は機械音痴ですし、世代が世代ですので、インターネットはサーチに使うだけで、自分は積極的に書き込むことはなんにもしていない。コンピューターで書くことは書いていますが。ただ、インターネットの使い方ということに関して、梅田さんは、こんなことをおっしゃっています。ネット上で流通している日本語と英語との内容にもの凄いの、開きがあると。それが、とっても楽天的な人だった彼を、この数年間、悲観的な人にしてしまっているというのです。

英語でも、もちろん高校生たちがろくでもないことを書いて、自殺する子を出してしまったりとか、そういうことはあります。でも、それとは別に、インターネットという新しい技術のもつ可能性を極限まで推し進めて、インターネットのみができるいいことをどんどんやることが起こっている。ところが、日本ではそういうことがほとんど起こってない。その差は開くばかりだとおっしゃっていました。

これは先ほどから言っているように、英語が「普遍語」であるがゆえに、必然的に「叡智を求め人」を集め、必然的に知的、倫理的な重荷を負うというのも一因だと思います。でも、それだけでなく、インターネットという技術がどう使われるかは、その国の文化や書き言葉によって違ってくると思います。日本語に関していえば、実はもの凄く書きやすい言葉なんです。話し言葉をそのまま書けるような言葉です。特にコンピューターで漢字変換ができるようになってから、いよいよ簡単になりました。

たとえば、谷崎潤一郎が『文章読本』の中で『城の崎にて』という志賀直哉の作品を非常に褒めている。自分と文体は違うけれども非常に

いい作品だと。実際に非常にあれはいいんです。でも、どういいかという、文章が簡潔なんです。しかも短い作品に、何度も同じ文章がくり返される。私は淋しかった、淋しかった、淋しかったと。日本語だと、何だかそれが詩的に見えるんですよ。短い文体でよくって、くり返しがあってよくって、話し言葉にちょっとヴァリエーションをつけて変えるだけでいい。漢字あり、平仮名あり、片仮名あり、さらにいまの絵のマークもあって、見ているだけでも、なんだかとても面白い言葉なんです。

ところが、英語というのは、ほんとうの「書き言葉」を書ける人の文章と、「話し言葉」をそのまま書いた人の文章の間では大きな差があり、それが歴然としているんです。フランス語もそうです。しゃべるように書くと、とても読めない。この人はしゃべったままの英語しか書けないなという印象しか与えません。同じ英語の中でも、まったくレベルの違うものが流通していて、それは瞬間的にわかるんですね。

例えば随分つまらない話ですけれども、以前O. J. シンプソンが逃亡する前に、遺言書のようなものを残していますが、それは「話し言葉」の英語でしかないので、新聞の紙面なので読むと、はっとするぐらいです。普通活字では目にしない英語、いまだったら乱暴に書かれたブログみたいな英語なんですよ。

つまり、「書き言葉」としての英語とかフランス語を書くのはかなりの訓練がいるのに対して、日本語はそこまでの訓練が必要ない。関係代名詞を駆使して理詰めを書く必要もないし、話し言葉のような短いセンテンスでどんどんやっていける。それでいて、それなりに面白いものが書ける。日本語だとブログなどにほんとうに書き込みやすいと思うんです。

司会 この『日本語が亡びるとき』が最初に話題になったのは、ブログの世界でしたよね。むしろ、プリントメディアとかほかのメディアは、それを追いかけるような形で取り上げた、ということがあったと思います。

質問 とっても興味を持って読ませていただきました。翻訳のことで、日本文学の翻訳の難しさに触れていらっしゃる。例えば、村上春樹さんの小説がいま非常に翻訳されて読まれている。ひょっとしてノーベル賞も取るんじゃないかといわれている。そこに新しい日本文学の突破性、可能性というか、一方で、翻訳できない言葉もあるという、その関係性についてお話をいただきたいと思います。

水村 唯一いえることは、ノーベル賞なんか無意味だということですね（笑）。何でかという、翻訳で読んでいるわけですから。ノーベル賞をお取りになった作家が日本にいらっしゃるの、日本に文学があるのを世界に示せるという点ではありがたいことです。でも、それ以上の意味はありません。外国人が日本文学を翻訳で読み、とやかくいうのは勝手ですが、それをこちらが真に受けることはない。もちろん、外国人でも、日本語をもの凄く高いレベルで読める人がいるというのなら別ですけども。一般的には単にそれは翻訳を判断しているだけです。そして、英語という言葉とか、西洋語という言葉は日本語を翻訳しやすい言葉などには変化していく必然性はなかった。だから、日本語のよしあしは分かり得ません。

日本文学のよしあしをいうのなら、あなたたちが、私たちの側に来て日本語をちゃんと読めるようになってから物をいってください（笑）。それしかいいようがないですね。

質問 先生のご著書を読まないで、非常に刺激的なお話を承ったんで、自分の考えを述べさせていただくんですけども、私は、すべての言語は、フォネティックであれ、ジオグラフィックであれ、感覚的に変換するものだと思うのです。例えば、一例を挙げますと、オペラを聞いていますと、言葉はわからないんですけども、触覚、ぞくぞくするような触覚を感じるとか、それからおいを感じるとか、そういうことがあるんです。けれども、先生のいわれたよ

うに、読まれるべき文学とか言葉ということは、視覚的分野だけが特化し過ぎていて、そういう五感の変換ということがないんですね。

だから、日本語のオペラというのは、これほど難しいというか、なりにくいものはないと思うのは、視覚性だけを求めて、聴覚性、もちろんサウンドとか、リズムとか、イントネーションとか、そういうものを一斉になくしちゃっている。私は、その意味はわからないんだけど、お経を聞いていると気持ちがいいんですね。お経にはそういう一つのリズムがあります。それから、語られるべき言葉ということでいえば、私は、稗田阿礼という人に会ったことはないけれども、なまじ識字率なんか高くしたことが日本語を悪くしたのではないかな、というふうに思うんです。いかがなものでしょうか。

水村 言葉というのはいろんな形で進化するもの、固有の形で進化、あるいは変化するものだと思います。そして、確かに日本語は非常に視覚を重要視した「書き言葉」として発展してきました。けれども、それは一つの言葉の発展として、こういうのもあるんです、という類いのことだと思います。こういうのもあるんですよ、と、世界の言葉の種の多様性のために、それはそれでいいのではないかなと思うんです。日本語は、確かに耳で聞いていておもしろい言葉には変化していかなかった。落語なんかは別ですけど。だけれどそれは、視覚的にこれだけおもしろい言葉になったことに対して払わねばならなかった犠牲だとも考えられます。そして、そんな言葉があること自体が面白いと。

西洋語って視覚的には実に退屈ですよ、見た限りにおいては、もうほんとにつまらない。アルファベットがずらっと並んでいるだけです。でも、確かに、オペラになったときなんかはおもしろい。例えばイタリア語でオペラを聴くとおもしろいですよね。母音が最後にきちんと発音されているのがとても生きて。もちろん、イタリアのオペラだからそういうふうにつくられているわけですけども、とても聴覚的な言葉だと思います。やはり、すべての言語が

同じように機能するというわけにはいかないんでしょね。英語とフランス語でも違いますし、それぞれの特徴があるというのは、それは構わないんじゃないかと思います。

質問 ご本の中にもあったんですが、漱石の評判が外国では悪いというか、あまりエスティメイトされていないようです。私も何となくそういう感じがします。漱石のことを外国ではいろいろいわれていると聞いたことはあまりない。つまり、翻訳がまずいわけでしょうか、あれは。

水村 やっぱり漱石の西洋語への翻訳はすごく難しいんです。文体にリズムあるし、それに漢字の使い方が生きているし。だから逆に一時期は中国や朝鮮の方たちが親しんで読んでくれたんだと思います。台湾ではつい最近まで人気がありました。西洋ではグレン・グールドが『草枕』を評価しているということが、漱石も評価されている例として出されることがありますが、あれは西洋人の勝手な評価であって——。要するに、西洋否定みたいなものとして、漱石評価というよりも、一つの東洋哲学評価のようなものです。漱石の文体を評価するというのは、それはもうほとんどあり得ないですよ。

質問 もう一つ、特別の人をバイリンガルに育てるのが実際問題として一番現実的ではないかと思うんですが、国際的な場に行って、自分の意見なんかをどんどんいって、反論があっても、それこそユーモラスにかわすとか、そういうことをやるためには、我々がしゃべる訓練をしなければならぬとも思うんです。フランスなんかだとしゃべる訓練をかなりやっているわけですね。学校でも。そういうこともやらないといけないのではないのでしょうか。

水村 そうなんですね。学者というのは多かれ少なかれ二重言語者になりますけれども、それは選ばれてというのではなくて、単に必然的にそうなる人たちです。選ばれたバイリンガル

というのは、しゃべる訓練を徹底的に受けねばならないと思います。ことに日本人はそうです。英語圏にある英語学校でよくいわれることですが、先生の課題は日本人をしゃべらせることと、インド人を黙らせることだといわれているぐらい（笑）、日本人はしゃべらない。ですから、おっしゃるように話せる人間をつくらなきゃならないから、それはもう細胞変化しなくてはならないぐらいの覚悟で、かなり徹底的に訓練を受けないとだめだと思いますね。

質問 我々の世代ではなくなりましたけれども、我々の祖父ぐらいですと、大体音読していたんですね。新聞の記事でも音読していました。先ほどから名前が出てこられた方も、大体受け入れられるときは、音読されていたと思うんです。水村さんはお若いから音読はされてないと思うんですが、音読と黙読による差みたいなことを説明いただけるとありがたいんです。

水村 私はよくわからないんですけれども、例えば、漱石の『虞美人草』ですね。『虞美人草』は漱石が生きているあいだは一番人気があった作品なんですが、それは馬琴なんかと同じように、音読という素地が生きていて、今の近代小説と違う形で、人々が小説を読んでいたからだったんだと思います。黙読だけになったときに、やっぱりいろんなものが失われるようになったと思いますね。しかたがない変化かもしれません。でも、谷崎なんかは非常に偉いと思います。書いた後、全部音読するそうですから。それで耳で聴いても美しいようにする。

私も、自分の作品を人前で読む機会があると、もっとちゃんと音読しておけばよかったと思いますね。音読して初めてみえる欠点がありますから。音読するというのは、黙読の時代に入った作家にとっても、本当はとっても重要なことだと思います。

質問 村上春樹さんに関連して翻訳のお話がありました。翻訳というのはなかなか難しい、

やっぱり原文で読まないで日本語の真の意味がなかなか伝わりにくいという趣旨だったかと思うんです。そうしますと、異文化理解というときに、翻訳ということはあまり意味をなさないということなのではないでしょうか。

水村 いや、そうは思っていません。日本語がやはりこれだけまともな国語になったのは、翻訳文化がこれだけ発達したからです。しかも日本のいいことは、アメリカ以外の国のいろんなほかの多言語を訳しているところにありますね。アメリカのような覇権国家とか、基軸国家というのは割合と傲慢になりますから、他人の言葉は訳さない。けれども、日本とかフランスとか、ちょっとマイナーになりつつあるような——まあ日本は最初からマイナーですけど——そういうところの言語は、ほかの文化も訳す。やっぱりほかの文化を訳すことによって、吸収できる部分というのは小さくない。

ただ支配的な文化が異文化を理解するほうが常に困難です。

映画を例にとると、小津安二郎などは、西洋にとっては新しい人間のあり方を世界に教えたと思うんですね。『麦秋』で、原節子が演じる娘と、やもめ男のお母さんとが勝手にその男の結婚の話を決めてしまう。決めたあと、原節子と男が行き違うシーンがあるんですが、男はそこでは何も知らされない。お母さんと女の人だけで結婚を決めてしまう世界というものを、西洋人が突然つきつけられるわけです。でも、もう小津の世界に引き込まれて観ているから、それも人間の生き方だと納得できる。文学は翻訳を必要としますから、映画よりはるかに大変ですが、例えば森鷗外の『阿部一族』を読んだら、切腹——「harakiri」と俗によばれていますが、切腹がいかに文化的なものであり、切腹を許されないことが屈辱であった世界が存在したという事実が理解できると思います。

翻訳といっても、異文化と触れることによって、人間社会の多様性を教えてくれるような翻訳と、異文化を自分と同じものに還元してしまおうとする翻訳と、2種類あると思います。異

文化をわかりやすく紹介するというのは、必ずしも正しい紹介にはならないわけですね。

だから、日本語の中でも西洋語に翻訳しやすいものが選ばれて翻訳される。日本文化の中でも西洋語に置き換えて理解しやすいものが輸出される。そういう悪循環はあると思います。人は異文化がもたらす異国趣味には興味をもつけれど、本当の異質性とは向き合いたくないというところがあります。当然、本当の異質性など見えないほうが、売れやすい。本当の意味で異文化に触れるというのは、知的な訓練も必要とする、困難なことだからです。それだからこそ、翻訳を通じての、異文化の理解は重要だと思っています。

質問 『日本語が亡びるとき』の、その亡びるという意味ですけども、つまり日本語がなくなるというようなことはないんですね。日本語で考える力が衰えること、イコール日本語の亡びであるというような意味かなと思っています。そういうことでよろしいですか。

水村 そうですね。人間として精神的に活発な人が日本語を読まなくなる。少なくとも、日本語を真剣に読まなくなる。日本語を読む人たちが、日本語で書かれたものに大きなものを求めなくなるにつれて、大志を持った人たちが日本語で書かなくなるという、悪循環のようなものが始まるのは避けたいということです。

例えば、漱石には、途中で死んでしまいましたけれども、正岡子規がいた。正岡子規のような人がいるんだから、何を書いたって、とことん自分の日本語をわかってくれる人がいると得心できたと思うのです。つまり、書く人間にとっては、どれぐらいの人がどれぐらいのレベルで読んでくれるだろうかということが重要なのです。二葉亭四迷なんか読むと、ああ、これだけの密度のものを読者が読むのを期待して書けたんだと、それがうらやましく思います。こんな密度で書いてしまったら、いまの人は読んでくれないだろうと。それに加速度がついて、もう読みやすいということだけに重点が置か

れるようになるんじゃないかと。

質問 私は水村さんの危機感にはかなり共感するんですけども、やっぱりそこまでではないんじゃないか、危機感が強過ぎるんじゃないかという意識もあります。日本はこれだけ小さいころから英語、英語とやってきて、学校でやって、街に出れば英会話塾がはんらんしていて、でも、しゃべれない。だから、そんなに英語の浸透というのは、心配するに及ばないんじゃないか、という意見には、どう答えますか。

それから、水村さんおっしゃる日本語とか文学がいま抱えている問題は、英語の浸透ということ以上に、ほかの要因がすごく大きいのではないかとも思うんですがいかがですか。

水村 これだけ英語がはんらんしているのに日本人がしゃべれないというのは、ほんとに確かです。この前ちょっとイギリス人からインタビューを受けたときに、これだけ、ありとあらゆるところから英語の音楽が流れ、英語の看板があり、英語が溢れ、それでいて街を歩く人がこれだけ英語がしゃべれないという国へ行ったことがない、といわれました（笑）。

外国人にはとてもわかりにくいことだと思います。こんなに英語が下手で、こんなに山のように日本語の本や雑誌が流通していて、なぜ、日本語が亡びるなんて言っているのか。

日本語を本当に読める人、しかも日本近代文学をきっちり読んできた経験のある人以外は、この危機感を共有することはできなくてしかたがないんです。だって、普通の意味では、日本語は絶対に亡びません。これだけ大きな日本語の市場があり、急速に少子化するといっても、まだしばらくは行くから、日本語がそんな意味で流通しなくなることはあり得ない。それから、多分新聞やある種の雑誌で使われたりしている日本語は、それなりによくなっていていくぐらいかもしれないですね。もっと外国のこともよくわかってきていて、風通しがいいし、知識の蓄積が増えてきていますから。

問題は、日本語が最高のところで機能し続け

るかどうかです。そして、それは、まさに、おっしゃったように、英語の支配によって、そうなったというのではない。ほかに娯楽が増えたというだけでもない。やはりもう、日本の戦後教育が日本語というものを粗末にしていた結果が、だんだんと現れてきてしまったんだと思います。そこに、無防備に英語、英語とあせってはいいよ日本語がだめになる。

これからは、英語が「普遍語」であることを意識して、そのうえで日本語を護ろうとしない限り、優秀な人たちが日本語から離れていってしまう。私自身、両方の言葉を行ったり来たりしている人の中には入っていますが、そうすると、かなりの人が実際に英語で書き始めているのが見えてしまいます。日本にいると見えにくいのですが、ああ、惜しい人材が英語にいつちゃったという、そんな感じなんです。

司会 どうもありがとうございました。最後に、水村さんからお話があるので、ちょっと聞いてください。

水村 ごめんなさいね、もう遅いのに。きょうせっかく記者の方たちに集まっていたので、先ほどもあったインターネットの問題とかかわるんですけども、一つだけ報告しておきたいことがあります。

どういう人たちかによってかわからないんですけど、ネット書店大手の Amazon で、『日本語が亡びるとき』の5つ星のレビューが操作されて、消されているんですね。私は自分に対してのネガティブな評価などを読むと非常に動揺するので、自分自身では見ないんです。けれどもあるとき、私の知人が、5つ星が消されていることに気がついた。

それについての資料を用意しました。受付に置いてありますので、興味がある方は、薄い一枚だけのと、もう少し分厚い、筑摩書房と、Amazon とのやりとりなどが入っているのと両方ありますので、お持ち帰りください。

私がここで問題だと思うのは、そういうことをやっている人たち以上に、Amazon の対応の

しかたなんです。筑摩が一所懸命説明を求めているのに、ほとんどまともに対応してくれていない。ガイドラインとして、800字以上のものはだめだとかいうようなことで、自動返信のような返事が返ってくるだけです。800字以上のレビューというのは、ほかの方のをご覧になればたくさんあって、なぜ私のがねらい撃ちされているのかわかりません。

Amazon は大きな会社として公共性を持った法人として存在している。さらには、レビューがあるということ、一応セールスポイントにしている。公共性を持った法人としてきちんと対応しないということは、随分問題があると思っています。それだけです。

司会 水村さんの今度の小説は新聞連載小説だそうです、それについて何かありますか。

水村 いままでは『私小説』とか『本格小説』とか変な題をつけていましたけれども、今度はごく普通の小説です。中高年の女性、私みたいな女の人が喜んで読みそうな、それこそ、卑近な問題——ごめんなさいね——つまり母親が死で遺産が入り、夫を離婚できるというような、そんな話にしようかなと思っています。新聞を読む年代の読者にそのような話なら興味をもってもらえるのではないかと思って。

司会 何新聞に載るんですか。

水村 読売の土曜連載です。

司会 それでは、日本記者クラブからお礼に記念品を差しあげ終了にします。ありがとうございました。(拍手)

文責・編集部